

東京都台東区の「きぼうのいえ」



ホームレス専用のホスピス「きぼうのいえ」を運営する山本雅基夫妻



枕元で患者のバイオリズムに合わせてハープ演奏（きぼうのいえ）

うのいえ」は、2002年秋にオープンした。難病の子どもと家族の支援運動から転じた山本雅基さんが建設。大都市の片隅で行き場がなくなった身寄りのない患者のために、21の個室のほか診察室、食堂・厨房、浴室、談話室、礼拝堂などを備えた鉄筋4階建ての集合住宅だ。医療、看護、介護、厨房は周辺の診療所、訪問看護ステーション、ホームヘルプ会社を利用する地域資源活用型のコミュニティケアである。

身の回りの世話は「ファミリーボランティア」と呼ぶ市民30人が入れ代わり立ち代わりやっつけてこなす。子ども連れで通う女性の大学教員、学生、主婦ら顔ぶれは多彩。本邦初のミュージックサナトリロジー（死生音楽療法）は、ここならではの画期的なスピリチュアルケアだ。末期患者の枕もとで患者のバイオリズムに合わせてハープを演奏・演奏する癒しのケアとも呼ぼうか。

氏）。その実現には地域住民の参加が欠かせない。今年中にNPO法人コミュニティケアリンク（仮称）を立ち上げ、来年秋にオープンの予定だ。

市民が創るコミュニティケア

この他にも草の根からの様々な取り組みが、今、全国で広がっている。

6月27日、仙台市内太白区の一軒住宅で、在宅緩和ケアセンター「虹」のデイホスピス（日帰りホスピス）が誕生した。開設者は訪問看護師の中山康子さん。スタッフは看護師3人（パート1人含む）と市民ボランティア7人。うち1人はコンピュータに詳しい。もう1人は70歳代の弁護士で週1回、遺言やりビングウイール（尊厳死の宣言書）など法律相談も引き受ける。

①外来通院中のがんや難病の患者らのためのデイサービス、②在宅医療のコーディネート、医師

との車座懇談会、情報誌発行、緊急時の生活支援、③ホスピス看護師の支援ネットワークづくりや研修会などと多彩。デイサービスは定員10人で週3回開く予定だ。

コミュニティケアとは「専門職と住民自身が地域の中で一緒に学習し、共に介護力を強めていくこと」（中山さん）。このため大病院からの誘いを断り「町の中」にこだわった。看護師が医師や病院の協力で運営する市民運動が望ましいと考へNPO法人にした。こうした草の根の仕組みが一粒の麦のように地に広がればコミュニティケアの土壌を豊かにするだろう。

* *

東京・台東区の下谷街、通称山谷地区にある「きぼ



NPO法人在宅緩和ケア支援センター「虹」の代表理事、中山康子看護師